英文解釈 L01 第 21 講 名詞の内容を説明する同格 that を読む

学習目標

- fact・idea・news などの名詞と、その内容を説明する同格の that 節を結び付けて読める。
- 同格の that 節と既習の関係代名詞 that を、名詞との意味関係と節内部の構造から区別できる。
- 名詞句全体の主節での役割と、that 節内部の主語・述語を分け、意味や確度を変えずに全文を訳せる。

1. 名詞の後ろの that は何を説明しているのか

解説

英文を読んでいると、名詞の直後に that が現れることがある。ここで重要なのは、that を見た瞬間に関係代名詞だと決めないことだ。まず、その名詞について後ろの節が何を説明しているのかを考える。

例えば、次のまとまりを見てみよう。

the news that the ferry may return next week

news は「知らせ」という名詞である。知らせには、普通「何についての知らせなのか」という内容がある。この表現では、that 以下の the ferry may return next week が、その内容を具体的に示している。

「フェリーが来週戻ってくるかもしれない」というのが、知らせの中身である。news という名詞自体がフェリーを戻したり、何かの動作をしたりしているわけではない。

このように、名詞の後ろに続いて、その名詞が表す内容を説明する that 節を**同格の that 節**という。

同格の that 節

同格の that 節とは、fact（事実）、idea（考え・案）、news（知らせ）などの名詞に続き、その名詞が表す内容を具体的に述べる that 節である。

基本的な意味関係は「〜という事実」「〜という考え」「〜という知らせ」と捉えられる。

同格の that は、関係代名詞のように先行する名詞の代わりとなって節内部の主語・目的語を担うものではない。that 以下には、それ自体の主語と述語を持つ内容が続く。

ここは覚える

本講では、同格の that 節を導く基本名詞として、次の 3 語を扱う。

- **fact**：事実
- **idea**：考え・案
- **news**：知らせ・ニュース

名詞の後ろの that 節が、その名詞の「内容そのもの」を述べているかを確かめる。

これらは基本例であり、名詞なら何でも同じ形で同格の that 節を取れるわけではない。

©ミライコーチング

同格の that と関係代名詞 that を比べる

解説

同じ news でも、後ろの that 節が果たす役割は異なる。

① the news that the ferry may return next week

「フェリーが来週戻ってくるかもしれないという知らせ」

that 以下は news の内容を説明している。節内部では the ferry が主語、may return が述語であり、return はここでは目的語を取らない。news が節内の主語や目的語を補う関係ではない。

② the news that surprised the passengers

「乗客たちを驚かせた知らせ」

こちらは「どの知らせなのか」を説明する関係節である。surprised の主語に当たるのは先行詞 news であり、関係代名詞 that がその役割を担っている。

この違いを、次の 2 つの問いで考えると分かりやすい。

- **同格の that**：「知らせの中身は何か」
- **関係代名詞 that**：「どの知らせについて述べているか」

内容を説明することと、名詞が指す対象を限定することは、別の関係である。

ただし、「that の後ろが完全な文なら必ず同格」という判定はできない。節内の主語・目的語などの役割を確認すると同時に、前の名詞が表す内容を述べているかを確かめる必要がある。日本語で「という」と訳せるかどうかだけでも決定しない。

名詞句の外側と that 節の内側を分ける

解説

次の英文では、名詞句全体の役割と、that 節内部の骨格を区別しよう。

The fact that the door was locked surprised everyone.

主節の中心は「ある事実が全員を驚かせた」という関係である。

- 主節 S：The fact that the door was locked
- 主節 V：surprised
- 主節 O：everyone

主語となる名詞句の内部を見ると、fact の内容が that the door was locked で説明されている。

- 内容節 S：the door
- 内容節 V：was locked

本講では、was locked と後の演習に出てくる was closed を、状態を表す受動態の be＋過去分詞として、一まとまりの V に示す。形容詞 C によって状態を表すと捉える分析も、一律に誤りとはしない。

ここで、主節の主語を the door と取り違えてはいけない。全員を驚かせたものとして主節の主語になっているのは、「ドアに鍵がかかっていたという事実」全体である。

英文を読むときは、まず名詞と内容節を一まとまりにし、そのまとまりが主節のどこに入るのかを確かめる。さらに、その内部の主語と述語を読む。こうすれば、二つの節の骨格を混同せずに済む。

解説

構造を表すときは、次の記号を用いる。

構造表示の凡例

- 〈 〉：名詞の働きをする大きなまとまり
- 〔 〕：名詞を説明する形容詞の働きをするまとまり
- ( )：動詞や文全体などを説明する副詞の働きをするまとまり
- S：主語／V：述語動詞・動詞句／O：目的語／C：補語／M：修飾部

構造表示では V を下線で示す。M は修飾部を表すが、必ず省略できるという意味ではない。

同格の that 節を含む名詞句は、例えば〈the fact 〈that the door was locked〉〉のように、内側と外側を分けて捉えられる。一方、関係節による修飾では〈the news 〔that surprised the passengers〕〉のように、その名詞を説明する関係を表す。

括弧は原文の文字を変更するものではなく、各まとまりの働きを確認するための表示である。

〈the news 〈that 〈the ferry〉 may return (next week)〉 〉
S V M

S “the ferry” / 内容節 S / 同格の that 節は news の内容を示す。主節の S/O ではない。
V “may return” / 内容節 V / may は可能性を表し、return とともに述語を作る。
M “next week” / 時の M / 内容節内で戻る時を示す。

〈the news 〔that surprised 〈the passengers〉 〕 〉
S V O

S “that” / 関係節 S / 関係代名詞 that は先行詞 news を受け、関係節内の主語となる。
V “surprised” / 関係節 V / 先行詞 news が乗客たちを驚かせた関係を表す。
O “the passengers” / 関係節 O / surprised の対象を表す。

〈The fact 〈that 〈the door〉 was locked〉 〉 surprised everyone .
S V O

S “The fact that the door was locked” / 主節 S / fact とその内容を示す that 節を含む名詞句全体が主節 S となる。
V “surprised” / 主節 V / 名詞句全体が主語となる主節の述語。
O “everyone” / 主節 O / surprised の対象。内容節内部の役割とは区別する。

〈The fact 〈that 〈the door〉 was locked〉 〉 surprised everyone.
S V

S “the door” / 内容節 S / 同格の that 節内部の主語。fact が表す内容の一部。
V “was locked” / 内容節 V / 状態を表す受動態として was locked 全体を V とする本教材の採用分析。

知らせ・考えと事実を混同しない

idea や news の内容が that 節で説明されていても、その内容が実際に実現したとは限らない。

例えば、the news that the ferry may return next week は「フェリーが来週戻るかもしれないという知らせ」であり、実際に戻ったことを示さない。may の可能性を落とさずに読む必要がある。

一方、the fact that … は「〜という事実」を表す。名詞の意味に合わせて内容の扱いを変え、原文にない確定や実現を訳に加えない。

---

2. 例題

1

英文

The idea that our class could hold a book exchange spread quickly.

語注：book exchange「本の交換会」／hold「（会を）開く」／spread「広まった」（spread の過去形）

a. idea と that 以下がどのような関係にあるかを、節内部の構造と名詞句全体の主節での役割を根拠にして示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

解説

a の解答・構造と根拠

idea と that our class could hold a book exchange は、**名詞とその内容を示す同格の関係**にある。

that 以下が表すのは「私たちのクラスで本の交換会を開ける」という案の内容である。

内容節の内部は、次のように成立している。

- S：our class
- V：could hold
- O：a book exchange

hold の目的語は a book exchange であり、idea が節内部の不足する目的語を補っているわけではない。idea は「どの案か」を関係節で限定されているのではなく、その案の中身を説明されている。

外側の主節では、〈The idea 〈that our class could hold a book exchange〉〉全体が S となり、spread が V、quickly が M となる。つまり「案が広まった」という主節の骨格の中で、その案の内容が that 節によって示されている。

b の解答

直訳： 私たちのクラスが本の交換会を開けるという考えが、すばやく広まった。

満点の訳： 私たちのクラスで本の交換会を開けるという案が、すぐに広まった。

解説

could hold は「開ける」という可能性を含む表現である。案が広まったことは述べられているが、本の交換会が実際に開かれたとは書かれていない。

また、主節の動詞 spread の主体は our class ではなく、内容節まで含む名詞句全体である。節内の人物や組織を主節の主語に取り違えないことが重要となる。

〈The idea 〈that 〈our class〉 could hold 〈a book exchange〉〉〉 spread quickly .
S　V　M

S “The idea that our class could hold a book exchange” / 主節 S / idea とその内容を示す that 節を含む名詞句全体が主節 S となる。
V “spread” / 主節 V / 名詞句全体を主語とする主節の述語。
M “quickly” / 主節 M / 案が広まった様子を示す。

©ミライコーチング

〈The idea 〈that 〈our class〉 could hold 〈a book exchange〉 〉 〉 spread quickly.
S V O

S “our class” / 内容節 S / 同格の that 節内部の主語。主節 S 全体とは区別する。
V “could hold” / 内容節 V / could は可能性を表し、hold とともに述語を作る。
O “a book exchange” / 内容節 O / hold の目的語。idea が節内部の不足する目的語を補うわけではない。

2

英文

The idea that changed our schedule came from a young teacher.

語注：schedule「予定・日程」／come from「〜から出る、〜に由来する」

a. idea と that 以下がどのような関係にあるかを、節内部の構造と名詞句全体の主節での役割を根拠にして示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

解説

a の解答・構造と根拠

idea と that changed our schedule は、**名詞とそれを修飾する関係節の関係**にある。

that は関係代名詞で、先行詞 idea を受け、関係節内部では changed の主語として働く。関係節の内容を考えると、「その案が私たちの予定を変えた」という関係が成立する。

- 関係節 S に相当するもの：idea（関係代名詞 that が受ける先行詞）
- 関係節 V：changed
- 関係節 O：our schedule

ここで that 以下は、「案の中身が何か」を説明しているのではない。「私たちの予定を変えた」という特徴によって、どの案なのかを説明している。

主節では、〈The idea 〔that changed our schedule〕〉全体が S、came が V、from a young teacher がその出所を表すまとまりである。

b の解答

直訳： 私たちの予定を変えたその案は、ある若い教師から出た。

満点の訳： 私たちの予定を変えることになったその案は、ある若い教師が出したものだった。

解説

第 1 問では idea の内容を that 以下が述べていた。一方、この英文では idea 自身が changed の主語に対応している。

したがって、the idea that changed our schedule を「私たちの予定が変わったという案」と訳してはいけない。それでは、案の内容を述べる同格の関係にすり替わってしまう。

関係代名詞 that を読む際は、先行詞が節内部のどの役割を担うかを確認する。主語に対応する場合も、目的語に対応する場合も、この考え方を使える。

〈The idea 〔that changed 〈our schedule〉 〕〉 came (from 〈a young teacher〉).
S V M

S “The idea that changed our schedule” / 主節 S / idea とそれを限定する関係節を含む名詞句全体が主節 S となる。
V “came” / 主節 V / 名詞句全体を主語とする主節の述語。
M “from a young teacher” / 主節 M / 案の出所を示す。

〈The idea 〔that changed 〈our schedule〉〕〉 came (from 〈a young teacher〉).
S V O

S “that” / 関係節 S / 関係代名詞 that は先行詞 idea を受け、関係節内部の主語となる。
V “changed” / 関係節 V / 先行詞 idea が予定を変えた関係を表す。
O “our schedule” / 関係節 O / changed の対象。案の内容を示す同格節ではない。

3. 演習問題

次の各英文について、指定された名詞と that 以下の関係を確認し、全文を訳せ。名詞句全体の外側での役割と、節内部の構造を混同しないこと。

1

英文

The fact that the small bridge was closed worried the local shop owners.

語注：shop owner「店主」／local「地元の」／worry「〜を心配させる」

a. fact と that 以下がどのような関係にあるかを、節内部の構造と名詞句全体の主節での役割を根拠にして示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

2

英文

The manager shared the news that the shop might close next month.

語注：share「伝える、共有する」／might「〜かもしれない」／close「閉店する」

a. news と that 以下がどのような関係にあるかを、節内部の構造と名詞句全体の主節での役割を根拠にして示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

3

英文

Our biggest surprise was the news that the old theater might reopen in spring.

語注：theater「劇場」／reopen「再開する、再び開く」

a. news と that 以下がどのような関係にあるかを、節内部の構造と名詞句全体の主節での役割を根拠にして示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

©ミライコーチング

4

英文

After the meeting, the neighbors supported the idea that the empty shop could become a small reading room.

語注：neighbor「近所の人」／support「〜を支持する」／empty shop「空き店舗」／reading room「読書室」

a. idea と that 以下がどのような関係にあるかを、節内部の構造と名詞句全体の主節での役割を根拠にして示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

5

英文

The news that surprised the drivers was about the new parking rules at the station.

語注：driver「運転手」／parking rules「駐車規則」／be about「〜に関するものである」

a. news と that 以下がどのような関係にあるかを、節内部の構造と名詞句全体の主節での役割を根拠にして示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

6

英文

The idea that the engineers discussed last week was included in the final design for the playground.

語注：engineer「技術者」／discuss「〜について話し合う」／be included in「〜に含まれる、〜に盛り込まれる」／design「設計・設計案」／playground「遊び場」

a. idea と that 以下がどのような関係にあるかを、節内部の構造と名詞句全体の主節での役割を根拠にして示せ。

b. 英文全体を自然な日本語に訳せ。

©ミライコーチング

4. 演習問題の解答・解説

1

英文

The fact that the small bridge was closed worried the local shop owners.

a の解答・構造と根拠

fact と that the small bridge was closed は、**名詞とその内容を示す同格の関係**にある。

that 以下は「その小さな橋が閉鎖されていた」という事実の内容を述べている。

内容節の内部は次の構造である。

- S：the small bridge
- V：was closed

the small bridge について、was closed という状態が述べられている。fact が節内の主語や目的語を補っているわけではない。

主節の骨格は次のとおりである。

- S：The fact that the small bridge was closed
- V：worried
- O：the local shop owners

〈The fact 〈that the small bridge was closed〉〉という名詞句全体が、「店主たちを心配させたもの」に当たる。

b の解答

直訳： その小さな橋が閉鎖されていたという事実が、地元の店主たちを心配させた。

満点の訳： その小さな橋が閉鎖されていたことを、地元の店主たちは心配した。

解説

ここでは fact が内容節の表すことを事実として位置付けている。that 以下を主節から独立した別の出来事として読むのではなく、「橋が閉鎖されていたという事実」を主節の主語として捉える。

worry は「人を心配させる」という他動詞である。満点の訳では店主たちを日本語の主語にしているが、心配の原因となった事実と、心配した店主たちの関係は変えていない。

橋が閉鎖された理由までは英文にないため、訳に補う必要はない。

〈The fact 〈that 〈the small bridge〉 was closed〉〉 worried 〈the local shop owners〉.
S　V　O

S “The fact that the small bridge was closed” / 主節 S / fact とその内容を示す that 節を含む名詞句全体が主節 S となる。
V “worried” / 主節 V / 名詞句全体を主語とする主節の述語。
O “the local shop owners” / 主節 O / worried の対象。心配したのは地元の店主たちである。

〈The fact 〈that 〈the small bridge〉 was closed〉〉 worried 〈the local shop owners〉.
S　V

S “the small bridge” / 内容節 S / 同格の that 節内部の主語。主節 S 全体とは区別する。
V “was closed” / 内容節 V / 状態を表す受動態として was closed 全体を V とする本教材の採用分析。

2

英文

The manager shared the news that the shop might close next month.

a の解答・構造と根拠

news と that the shop might close next month は、**名詞とその内容を示す同格の関係**にある。

that 以下が具体的に述べるのは「その店が来月閉店するかもしれない」という知らせの内容である。

内容節の内部では、the shop が S、might close が V、next month が時を示す M となる。close はこの文では「閉店する」という自動詞として用いられており、後ろに目的語を必要としない。

主節は次の構造である。

- S：The manager
- V：shared
- O：the news that the shop might close next month

shared の目的語は news だけでなく、内容節を含む〈the news 〈that the shop might close next month〉〉全体である。

b の解答

直訳： その店が来月閉店するかもしれないという知らせを、店長は伝えた。

満点の訳： 店長は、その店が来月閉店するかもしれないという知らせを伝えた。

解説

同格の that 節は名詞の直後にあっても、主節動詞 shared の目的語を that 節だけに置き換えるわけではない。主節で「何を伝えたのか」と考えれば、その答えは「知らせ」全体となる。

さらに、might close という可能性を表す述語を「閉店する」と断定してはいけない。店長が知らせを伝えたことと、知らせの内容が実現することは別である。

〈The manager〉 shared 〈the news 〈that 〈the shop〉 might close (next month)〉 〉.
S　V　O

S “The manager” / 主節 S / 知らせを伝えた主体。
V “shared” / 主節 V / 伝えたという主節の動作。
O “the news that the shop might close next month” / 主節 O / news とその内容を示す同格の that 節を含む名詞句全体が目的語となる。

〈The manager〉 shared 〈the news 〈that 〈the shop〉 might close (next month)〉 〉.
S　V　M

S “the shop” / 内容節 S / 同格の that 節内部の主語。主節の主語とは区別する。
V “might close” / 内容節 V / might は可能性を表し、close とともに述語を作る。閉店を断定しない。
M “next month” / 内容節 M / 閉店する可能性のある時を示す。

3

英文

Our biggest surprise was the news that the old theater might reopen in spring.

a の解答・構造と根拠

news と that the old theater might reopen in spring は、**名詞とその内容を示す同格の関係**にある。

内容節は次の骨格を持つ。

- S：the old theater
- V：might reopen
- M：in spring

reopen はここでは「再開する」という自動詞である。the old theater が再開する可能性を述べており、news が節内部で不足する主語や目的語になる関係ではない。

外側では、Our biggest surprise が S、was が V、〈the news 〈that the old theater might reopen in spring〉〉 が C である。

つまり、主節の「私たちにとって最大の驚きだったもの」の内容を、同格の that 節を含む名詞句全体が示している。

b の解答

直訳： 私たちの最大の驚きは、その古い劇場が春に再開するかもしれないという知らせだった。

満点の訳： 私たちにとって何より驚きだったのは、その古い劇場が春に再開するかもしれないという知らせだった。

解説

第 1 問では同格の that 節を含む名詞句全体が主語、第 2 問では目的語だった。この文では、その名詞句全体が補語になっている。主節での役割が変わっても、news と that 以下の内容対応は変わらない。that 節を主節の新たな主語として扱わず、まず名詞句全体を一まとまりとして読むことが重要である。

また、might reopen は再開の可能性を示す表現であり、劇場の再開が決定した、あるいは実現したとは訳さない。

〈Our biggest surprise〉 was
S V

〈the news 〈that 〈the old theater〉 might reopen (in spring)〉 〉.
C

S “Our biggest surprise” / 主節 S / 私たちにとって最大の驚きだったものを示す。
V “was” / 主節 V / 主語と補語を結ぶ主節の述語。
C “the news that the old theater might reopen in spring” / 主節 C / news とその内容を示す同格の that 節を含む名詞句全体が補語となる。

〈Our biggest surprise〉 was 〈the news 〈that 〈the old theater〉 might reopen (in spring)〉 〉.
S V M

S “the old theater” / 内容節 S / 同格の that 節内部の主語。主節の補語全体とは区別する。
V “might reopen” / 内容節 V / might は可能性を表し、reopen とともに述語を作る。再開を断定しない。
M “in spring” / 内容節 M / 劇場が再開する可能性のある時期を示す。

4

英文

After the meeting, the neighbors supported the idea that the empty shop could become a small reading room.

a の解答・構造と根拠

idea と that the empty shop could become a small reading room は、**名詞とその内容を示す同格の関係**にある。

ここでの案の中身は「その空き店舗が小さな読書室になり得る」ということである。

内容節の内部は次の構造である。

- S：the empty shop
- V：could become
- C：a small reading room

become は「〜になる」という意味で、後ろの a small reading room が主語の変化後の状態を示す補語となる。節内部では idea が主語や目的語の不足を補う必要はない。

主節は、After the meeting という時を表す M に続き、the neighbors が S、supported が V となる。O は〈the idea 〈that the empty shop could become a small reading room〉〉全体である。つまり、近所の人たちが支持した対象は、that 節の内容を持つ一つの案である。

b の解答

直訳： 会議の後、近所の人たちは、その空き店舗が小さな読書室になり得るという案を支持した。

満点の訳： 会議の後、近所の人たちは、その空き店舗が小さな読書室になり得るという案に賛成した。

解説

この英文で確定しているのは、会議の後に近所の人たちが案を支持したことである。空き店舗が実際に読書室へ変わったとは述べられていない。

満点の訳でも could become を「小さな読書室になり得る」と表し、空き店舗が読書室になる可能性を保っている。実際に読書室になったと断定しないことが重要である。

after the meeting は主節の状況を示し、that 以下は idea の内容を示す。それぞれのまとまりが何に結び付くかを分けると、情報を混同せずに訳せる。

©ミライコーチング

(After 〈the meeting〉) M, 〈the neighbors〉 S supported V

〈the idea 〈that 〈the empty shop〉 could become 〈a small reading room〉〉〉 O.

M “After the meeting” / 主節 M / 会議の後という主節の時を示す。
S “the neighbors” / 主節 S / 案を支持した主体。
V “supported” / 主節 V / 近所の人たちが案を支持したことを表す。
O “the idea that the empty shop could become a small reading room” / 主節 O / idea とその内容を示す同格の that 節を含む名詞句全体が目的語となる。

(After 〈the meeting〉), 〈the neighbors〉 supported 〈the idea 〈that 〈the empty shop〉 S could become V 〈a small reading room〉 C〉〉.

S “the empty shop” / 内容節 S / 同格の that 節内部の主語。主節の目的語全体とは区別する。
V “could become” / 内容節 V / could は可能性を表し、become とともに述語を作る。実現を断定しない。
C “a small reading room” / 内容節 C / 空き店舗がなり得る状態を表す補語。

5

英文

The news that surprised the drivers was about the new parking rules at the station.

a の解答・構造と根拠

news と that surprised the drivers は、**名詞とそれを修飾する関係節の関係**にある。

that は関係代名詞で、先行詞 news を受け、関係節内部では surprised の主語として働く。

関係節は次の関係を表す。

- S に相当するもの：news（関係代名詞 that が受ける先行詞）
- V：surprised
- O：the drivers

「その知らせが運転手たちを驚かせた」という関係が成立している。that 以下は知らせの中身を示すのではなく、運転手たちを驚かせたという特徴によって news を限定している。

主節では〈The news 〔that surprised the drivers〕〉全体が S、was が V、about the new parking rules at the station が知らせの話題を述べる C となる。ここでは、at the station は駐車規則が適用される場所を示し、the new parking rules を説明すると捉える。

b の解答

直訳： 運転手たちを驚かせたその知らせは、駅の新しい駐車規則についてのものだった。

満点の訳： 運転手たちを驚かせた知らせは、駅の新しい駐車規則に関するものだった。

解説

もし that 以下を同格の内容節として読めば、「運転手たちが驚いたという知らせ」のように解釈したくなるかもしれない。しかし、surprised の主語に当たるのは news であり、その知らせが運転手たちを驚かせたのである。

また、that surprised the drivers は「どの知らせか」を説明し、about the new parking rules at the station は主節で知らせの話題を述べる。

©ミライコーチング

後半の about 以下は、知らせが何についてのものかという話題を示している。知らせの具体的な内容を直接述べる同格の that 節とは異なる。名詞の後ろに that があることだけで同格と判断することはできない。

〈The news 〔that surprised 〈the drivers〉〕〉 was 〔about 〈the new parking rules 〔at 〈the station〉〕〉〕.
S V C

S “The news that surprised the drivers” / 主節 S / news とそれを限定する関係節を含む名詞句全体が主節 S となる。
V “was” / 主節 V / 主語と補語を結ぶ主節の述語。
C “about the new parking rules at the station” / 主節 C / 知らせの話題を示す補語。at the station は駐車規則の適用場所を説明する。

〈The news 〔that 〈surprised 〈the drivers〉〕〉 was 〔about 〈the new parking rules 〔at 〈the station〉〕〉〕.
S V O

S “that” / 関係節 S / 関係代名詞 that は先行詞 news を受け、関係節内部の主語となる。
V “surprised” / 関係節 V / 先行詞 news が運転手たちを驚かせた関係を表す。
O “the drivers” / 関係節 O / surprised の対象。知らせの内容を示す同格節ではない。

6

英文

The idea that the engineers discussed last week was included in the final design for the playground.

a の解答・構造と根拠

idea と that the engineers discussed last week は、**名詞とそれを修飾する関係節の関係**にある。

この that は目的格の関係代名詞であり、先行詞 idea を受ける。関係節の内部には、次の構造がある。

- S：the engineers
- V：discussed
- O に相当するもの：idea（関係代名詞 that が受ける先行詞）
- M：last week

discuss はこの文では「〜について話し合う」という他動詞である。the engineers discussed の後ろに目的語が現れていないのは、話し合った対象が先行詞 idea に対応しているためである。

that 以下は案の中身を示すのではなく、「技術者たちが先週話し合った」という特徴によって idea を限定している。

主節では、〈The idea 〔that the engineers discussed last week〕〉全体が S であり、was included が受動態の V、in the final design for the playground が含まれた先を表す M となる。

b の解答

直訳： 技術者たちが先週話し合ったその案は、遊び場の最終的な設計に含められた。

満点の訳： 技術者たちが先週話し合った案は、遊び場の最終設計に盛り込まれた。

解説　第 5 問では関係代名詞 that が節内部の主語に対応していたが、この文では目的語に対応している。the engineers discussed last week を「技術者たちが先週話し合った」と読んだとき、「何について話し合ったのか」という対象が先行詞 idea であると分かる。

一方、主節の was included は受動態であり、最終設計に盛り込まれたものは、関係節を含む名詞句全体が指す案である。話し合った技術者たちが最終設計に含まれたわけではない。

関係代名詞 that が主語に対応する場合も目的語に対応する場合も、先行詞と節内部の役割を結び付ければ、同格の that 節との違いを説明できる。

〈The idea 〔that 〈the engineers〉 discussed (last week)〕〉 was included
S V
(in 〈the final design 〔for 〈the playground〉〕〉).
M

S “The idea that the engineers discussed last week” / 主節 S / idea とそれを限定する関係節を含む名詞句全体が主節 S となる。
V “was included” / 主節 V / was included 全体が受動態の述語。案が設計に盛り込まれたことを表す。
M “in the final design for the playground” / 主節 M / 案が盛り込まれた先を示す。for the playground は design の用途を説明する。

〈The idea 〔that 〈the engineers〉 discussed (last week)〕〉 was included (in 〈the final
O S V M
design 〔for 〈the playground〉〕〉).

O “that” / 関係節 O / 関係代名詞 that は先行詞 idea を受け、discussed の目的語となる。
S “the engineers” / 関係節 S / 案について話し合った主体。主節 S 全体とは区別する。
V “discussed” / 関係節 V / 技術者たちが先行詞 idea について話し合ったことを表す。
M “last week” / 関係節 M / 話し合いが行われた時を示す。